龍谷大全集

第七巻

岩波書店刊行

左千夫全集 第七卷　第七回配本（全九卷）
昭和五十二年六月十三日　發行©
定價三五〇〇圓
著者　伊藤左千夫
發行者　岩波雄二郎
〒101 東京都千代田區一ツ橋二ノ五
發行所　株式會社 岩波書店
電話 〇三(二六五)四一一一
振替 東京六-二六二四〇
印刷・法令印刷　製本・三水舍
落丁本・亂丁本はお取替いたします

目　次

萬葉集新釋一卷上十二—十六……三
歌人閑語……二八
東京より……三六
雨が大好きだ……三八
文士と八月……四〇
短歌合評……四一
『アララギ』第二卷第一號選歌評……四七
蓼科山中より……四九
執筆……五〇
短歌研究一……五一
作歌餘滴……六二
放縱欄と歌會の歌……六五
『アララギ』第二卷第二號消息・稟告……六六

短歌研究 二 …… 六八
東京短歌會 …… 七六
木曾だより …… 七七
短歌研究三附記 …… 七八
『アララギ』第二卷第四號消息 …… 七九
予の見たる子規子 …… 八一
萬葉集新釋 一卷上 十七—十八 …… 八三
柿本人麿論 萬葉新釋一卷中 十九 …… 九六
萬葉集新釋 一卷中 二十—二十二 …… 一〇六
短歌研究 四 …… 一二七
慨嘆すべき歌壇 …… 一三〇
消息に代て一言を附す …… 一三七
妙な我れ …… 一三八
短歌研究 五 …… 一四一
短歌研究 六 …… 一四四
短歌研究に就て …… 一四七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

名士と花……一四八
歌と櫻花……一四九
短歌研究 七……一五三
曙覽之歌に就て……一六〇
『アララギ』第三卷第四號選歌評……一六三
唯眞抄 一……一六四
短歌研究 八……一六七
『アララギ』第三卷第五號選歌附記……一七六
卷頭の歌……一七七
唯眞抄 二……一七八
閑文字……一八一
『アララギ』第三卷第六號消息……一八三
「懸賞吟咏」選歌評……一八六
茶の湯の手帳 四……一八七
忘れ片身……一八九
唯眞抄 三……一九〇

アラヽギの評論に對する創作の批評に就て……一九三
『アララギ』第三卷第八號消息……二〇一
短歌研究 九……二〇二
堀内卓君を悲む……二〇五
唯眞抄 四……二〇八
短歌選抄 一……二一〇
短歌研究 十……二二六
唯眞抄 五……二三二
『アララギ』第四卷第一號消息……二三四
萬葉集新釋 一卷下 二十三—二十六……二三六
唯眞鈔 六……二六二
唯眞閑夜話 一……二六三
茶の煙 一……二六七
小說「分家」を出すに就て……二七〇
八行欄「雨の花野」……二七一
短歌研究 十一……二七三

茶の煙　二……二七六
『アララギ』第四卷第四號消息……二七八
茶煙抄　三……二七九
アララギ抄……二八一
牛舍での立ち話……二九三
唯眞閣夜話　二……二九六
茶煙日抄　一……二九八
唯眞閣夜話　三……三〇〇
茶煙日抄　二……三〇四
「分家」の筆を措いて……三〇五
『新小說』選歌評……三〇六
子規正岡先生……三〇八
茶煙日抄　三……三一一
滿洲雜詠序……三一三
短歌研究餘談……三一五
茶煙日抄　四……三二二

日本國民の嗜好的生活……三三
獨語錄 一……三二八
獨語錄 二……三二九
短歌選抄 二……三三三
『我が命』に就て……三五二
『アララギ』第五卷第一號消息……三五九
獨語錄 三……三六三
修養之工風……三六七
懸賞文藝「新年」選評……三七一
感　想……三七二
新しい歌と歌の生命……三七三
アララギの歌に就て……三七八
獨語錄 四……三八〇
『アララギ』第五卷第三號選歌評……三八二
懸賞文藝「早春家に籠る」選評……三八三
强ひられたる歌論……三八四

『新小說』選歌評……三九二
礎山先生論……三九三
柿の村人君へ……三九六
藝術上の氣品と云ふ事に就て……三九九
朝風暮雨……四〇四
予の「分家」に就て……四〇七
表現と提供……四〇八
どうも氣になる……四一三
おことはり……四一六
談話會記事……四一七
『悲しき玩具』を讀む……四一九
綠汁一滴 上……四二六
叫びと話 上……四三九
乃木大將自刃の觀……四四五
日本人は戰爭が强いばかりだ……四四六
雜錄三題……四四八

歌學び一口話……四五六
短歌選抄 三……四五九
綠汁一滴 下……四七九
獨語錄 五……四八三
文明茂吉柿乃村人評……四八六
古泉千樫中村憲吉評……四九一
叫びと話 下……四九五
歌の潤ひ……五〇五
叫びと俳句……五一三
御製より觀奉りたる仁德天皇……五二四
名士の愛讀書……五五六
短歌選抄 四……五五七
後記……五七一

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

歌論・隨想 三

萬葉集新釋　一卷上

〔十二〕

雜　歌

泊瀬朝倉宮御宇天皇代

泊瀬朝倉宮に天の下を統治せられた天皇の代といふことで卽雄畧天皇の御代である、

○

天皇御製歌

〔一〕　籠毛與、美籠母乳、布久思毛與、美夫君志持、此岳爾、菜採須兒、家告閑、名告沙根、虛見津、山跡乃國者、押奈戸手、吾許曾居、師吉名倍手、吾己曾座、我許曾者、背跡齒告目、家乎毛名雄母、

こもよ、みこもち、ふくしもよ、みふくしもち、このをかに、なつますこ、家のらせ、名のらさね、そらみつ、やまとの國は、おしなべて、あれこそ居れ、しきなべて、吾れこそませ、あれこそは、せとはのらめ、家をも名をも、

『こもよ』の『こ』は竹籠である　今の世に云ふ割籠(わりこ)刺籠(さしこ)駕籠(かご)などの『籠』である、玆では菜を入れる入物なり、

『もよ』はもやと同じにて助辭である、『我はもや』などいふと同詞、韻文の心から云へば『こもよ』と云ふもよの調子から次の『みこもち』の句を呼び起すのである、『みこもち』はみ籠持ちである、『み』は『み雲』『み山』などの『み』と同く飾りの詞である、

『ふくしもよ』『みふくしもち』ふくしは物の名、掘串であるとの事、物など掘る『ヘラ』の如き物なるか、鐵にて作れるを金ふくしと云ふとぞ、只のふくしは竹などにて作れるならん、

『このをかに』『菜つます兒』菜をつます兒は、菜をつみいます兒で丁寧な詞使になるのである、兒といふは多くの塲合女に對し親みの心で呼掛ける詞である、あの兒がとか此の兒がとか今の世にも云ふのと同意、

『家のらせ』末の文字『閑』とあるは誤字であるとの說がよい、猶種々の說あれど、『家のらせ』と訓むのがよい、家をつげよとの意、『名のらさね』は名をつげなさいなと云ふ如き意味で、家をつげなさい、さあ名をおつげなさいねと少しく促し云ふ意を含んでるのである、かゝる僅かな所にも韻文の精神が現はれてる、家を告げよ名をつげよと云ふ內にも次の一句は前の句よりも意味が强くなつて居る 聊か急き立てるやうな詞になつてる、其の心の動きを見逃してはならぬ、家をつげる名を告げると云ふは、吾邦の上古、男女相許す時に必ず、自分の本名と家柄とを告合ふ風習である、殊に女の兒は、垂乳根の母の呼ぶ名といふ詞がある位であるから、平日は本名を人中で呼ばなかつたものであらふ、それで殊につま定めといふやうな塲合に本名を名のる必要があつたものと見える、そこで直に家をのれと云はないで、告らせと伸ばし云ふのは丁寧な詞使である、家を告げよといふのも、御身は何所の家のものかと問ふのではない、御身の家柄はと問ふのである、天皇の身を以てしても、吾嬬にと思ふ程の女であるから、正しき敬語を用て居るらしい、且つ菜をつみ居る女と云つても、賤しい女ではないのであ

らふ、仁德天皇の思ひ人、吉備の黑姫なども手づから菜を採て天皇を饗したといふ位であるから、雄略天皇の此歌などもそれに近い逸話があつての事であらふ、

『そらみつ』『やまとの國は』そらみつは大和の枕詞である、饒速日命が天の磐船に乘りて大虛を翔行し時に大和の空に船を泊め、玆は空の津である、空の御津大和ぢやと言はれたに起つた詞であらふと云ふ古義の解が面白い、それで此に云ふ『やまと』は大和であれど心は天の下といふ意味である、『押しなべて』『吾れこそ居れ』此やまとの國は押しなびけて吾れこそ居れとの意である、總てを領有して居るの意『しきなべて』『吾れこそませ』しきは太敷坐すの敷と同じ天の下を押し平げの心である、此二句は云ふまでもなく前二句の意を繰返したものであれど、前にも云へる如く後の二句は意味が一層强まつて、吾れこそ坐せなど、天皇といふことを更に具体的に云ひ現して居る、如此稍同意義の詞を繰返すのは、感情の興奮から、自然に出てくる詞で、決して詞を綾なした、輕薄な飾りではない、心に溢れる興奮を强く云ひ現さんとする自然の動きである、歌を作る人々は心を潛めて考ふべき点である、餘計な飾り詞は飾れば飾る程歌の力が拔けるのである、後世長歌を作つた人達が、皆此精神を知らずに、詞飾りの眞似許りして居るから駄目なのである、

『あれこそは』『背とはのらめ』あれこそはの一句は種々の訓方と書方とがあつて、諸說紛々として居るが、予は斷然、吾許曾者の書方を採つて、あれこそはと訓む、元來此句は、一本には吾許者とあり一本には吾許曾者とある、古義の著者は『者』は誤字であるとして、『吾』の下に『乎』の一字を插入して『吾れをこそ』と讀んでゐるが勝手な訓方である、有る字を消して無い字を入れるなどは、寧無法と云はねばならぬ、一本にある通り、『吾許曾者』は最も面白いのである、少しも差支ないのみならず、却て其方が意味が面白いのに、勝手に字を入

れたり字を削つたりするのは甚だ宜敷くない、殊に此一句は此歌の全精神の集中した句である、『吾れこそは』と云つた一語が此歌の性命であるのだ、『吾をこそ』と『吾れこそは』とは自他の差別がある、丸で意味が反對になるのだ、それを自分一個の考で手を入れるとは以ての外の話である、能く能く解らぬ場合は別として、出來る限りは有る儘の文字で訓むべきは云ふまでもない、殊に此句或一本に正しく『吾許曾者』とあるからは其の通りに訓むが當前の話である、古義の著者は傑いだけに往々小癪なことをして困る、以上二句の心は、吾れこそは御身の夫と名るべきものなれとの意である、

『家をも名をも』これは前二句の餘意を受けて、吾れはかう家をも名をも告ぐるぞ、御身は速に御身の家と名とを告げて吾れに從ひませとの心である、此一句は作者自己の心を述て、始めの家告らせ名告らさねの句に照應したのである、

予が此歌を說つゝあるの時、春靄ほのかに庭をこめ鶯の聲頻りに庭の彼邊に聞ゆ、予は感奮して愉悅の心抑えきれないのである、如斯大なる歌尊い歌赫灼たる歌何とも稱贊の詞がないのである、年代から見れば雄略天皇より古い歌があるのに、殊に此歌を拔き出でゝ卷頭に出せる編者は、必ず此歌を讚美したものに違いない、予は此活眼ありし編者の話を直接に聞いて見たくて溜らない、此集あつて以來此歌の眞價を評した者が殆どないからである、いざ予をして肆に讚嘆の聲を放たしめよ、

品格ある詩韻に最も忌むべきは、露骨の殺風景にある、此歌まづ少女の手に持てる籠や布久志より、其少女の無邪氣な風姿に心動き、次で感情の動きが、溫麗なる波を起し、菜をつみいますなづかしき兒よと親みの思ひを强め、更に感情の浪が動きを早め、家をつげよさあ名は何といふぞ吾れは御身を愛するぞとの意を打出て、猶豫も

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com